



渥美半島の古道

—海の道・陸の道—

「田原街道」が主
流と
なつた江戸時代には、町人文化が花開き、一般の人たちも旅を楽しむことができるようになりました。

この時代、渥美半島を旅した俳人の中に**松尾芭蕉**がいます。芭蕉は、吉田を出発し田原街道を馬で伊良湖へ向かいました。道中、江比間や保美で句を詠んだほか、伊良湖では、「鷹つ見つけてうれしいらご崎」と詠んだ有名な句を残しました。

時代が進み、明治31年（1898）には、後に日本民俗学の重鎮となる**柳田國男**が伊良湖を訪れます。風の翌日、國男は恋路ヶ浜でやしの実を拾いました。東京に戻り、この話を**島崎藤村**に話したことがきっかけで生まれたのが、叙情詩『**椰子の実**』です。



◆五十三次名所図会「吉田」

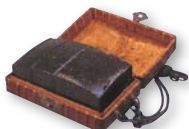
田原街道の起点となる吉田（豊橋市）の風景を描いたもの。江戸時代の旅人の風情を垣間見ることができます。



●道中合羽

◆江戸時代の旅装束

旅が一般的になると、便利な小物も増えてきました。道中では、旅籠や渡し舟なども活躍しました。



●道中弁当箱
(豊橋市二川宿本陣資料館蔵)



●方位磁針

◆宇津江坂

野田町と宇津江町の境にある西山を抜ける山道。かつてはここを旅人が往来しました。道沿いの石垣に往時の面影が残ります。



●小田原提灯
(上記3点:御厨野文庫蔵)



◆柳田國男逗留の地碑

伊良湖町にある柳田國男逗留の記念碑。柳田は、明治31年夏の約3か月間を伊良湖で過ごしました。その滞在記『遊海鳥記』（明治35年）は、日本民俗学の始まりの書といわれています。

海を味方につけた？ 往時の「田原城」

田原城は文明12年（1480）ごろ、戸田宗光によって築城されました。当時は海に囲まれており、その湾の形から「巴江城」とも呼ばれていました。現在は市街地が広がっています。



●田原城見取図。東・南側に田原湾が広がっていた

田原街道